中国の五山十刹制度について

——大乘寺所蔵寺伝五山十刹図を中心として——

石 井 修 道

現在、中国の五山十刹制度（以下、五山制度と呼ぶ）を述べ
る場合、宋濂（一三一〇—一三八一）撰の「住持淨慈禪寺孤峯
德公塔銘」〔宋學士全集〕巻四〇所収〕が最も初期の記事とさ
れる。その文によりて史弥遠（一一六四—一二三三）が宰相在
位の一二〇八—一二三三年の初期に、寧宗（一一九四—一二二
四在位）に奏上して成立した制度というのである。つまり五
山制度の成立を嘉定年間（一二〇八—一二二四）とみてきたの
である。しかし当時の文献の中で、このことを確かめること
はできず、先に言うように孤峯明徳（一二九四—一三七三）の
塔銘、つまり明初にはじめて言い出されたものであることが
わかる。因って五山制度については、現在ではまだ不明な点
が多く、今後に解明すべき課題なのである。仮に嘉定年間
が、五山制度の成立期とするならば、当時の五山や五山の住
持者がどのように取り扱われているかについては、別処〔中
国の五山十刹制度の基礎的研究〔一〕駒沢大学仏教学部論集第一三号、

中国の五山十刹制度について（石 井）

昭和五七年一〇月発行予定）で、今後検討していく予定である。
ところで五山制度が嘉定年間に成立していれば、嘉定一六
年（一二三三）に入宋し、宝慶三年（一二二七）に帰朝した永
平道元（一二〇〇—一二五三）や端平二年（一二三五）に入宋
し、淳祐元年（一二四一）に帰朝した東福円爾（一二〇二—
二八〇）が、五山制度について著述類に言及してもよいはず
であるが見い出せない。ところが道元将来になる大乘寺所蔵
『支那禪刹図式』（寺伝五山十刹図）二巻と同本異本の円爾の
将来になる東福寺所蔵『支那禪刹図式』（寺伝大宋諸山図）（下
巻補）（共に現在重要文化財）が伝っている。五山制度を検討す
る時に避けて通ることのできない問題であるから、この論文
は、これらの資料の性格を整理したものである。

ここで、まずこれらの文献の呼称の問題を先に述べておこ
う。大乘寺本は寺伝のように『五山十刹図』と呼び、この名
が一般に通用し有名である。しかし白石虎月氏は『続禪宗編

年史』（五一九頁）に、甲刹の金山寺に詳しく、淨慈寺については勅賜報恩光孝禪寺の勅額（但し東福寺本では越州天寧寺、諸山類集では台州万年寺とあるから、白石説は誤りで、恐らく淨慈寺の記録は皆無であろう）が存するのみで、十刹について述べるのはわずかであるから、五山や五山十刹の名を冠することはふさわしくなく、東福寺の寺伝でいうように「大宋諸山図」こそ、「蓋し恰形の題簽と精密なる内容を有せるものならん」とされる。確かに五十刹の全刹の位次を示した箇所もなく、五山十刹図の名はふさわしくない。『重要文化財²³』（毎日新聞社、昭和三年）では、『支那禪刹図式』と兩本とも呼び（明治四四年四月一七日国宝に指定登録の際の総称）、正式の一般の呼称のようにあるが、大乘寺本は元來、その名があったとは思われない（現存の大乘寺本は室町期の再写本で、原本の作成年次は後述する）。

大乘寺本の呼称について、無著道忠（一六五三—一七四五）は『大宋五山図』（無著は「名藍図」と呼ぶ）（柳田聖山編『勅修百丈清規左編、庸峭余録』付、中文出版社、昭和五年八月）の「記写道元和尚将来名藍図事」に次のように述べる。

（智）則曰、某曾在嘉州大乘寺。時住持人称良和尚。一日就問禪刹堂殿之位置。和尚窃告言、此山有道元和尚在唐写來名藍堂字圖与所謂一夜碧岩同秘重。則有時披袈裟入室、懇請一覽。和尚憐其真情、借自所藏副本。諸弟子知者希矣。則乃鎖一室、次第摹写。

功畢之後、更請出道元真本、逐一校讐、無復疑惑。（一二七一頁）さらに文をつづけ、無著が智則の写本を元に校写して図を完成していく事情が詳説される。また智則の跋に、

幸忝師（徳翁）手提起来示論乃曰、此書先輩秘在於当山來尚矣。今一感子至誠而已。時劣不覺拜起淚下、乃取將袈裟下去、就同府之法勝禪寺西軒密拜写。再入室拜借真筆來校合。敢雖塗抹点竇、不違毫髮意。唯要得其完全而已矣。（所謂兩軸先輩喚称五山十刹図矣）（一三三三頁）

とあって、天孝祖圍（智則）首座（一七〇六年歿）が、大乘寺の徳翁良高（一六四九—一七〇九）の下で書写した旨を述べる。それらによると、兩軸は一夜碧岩と同じく道元の将来とい、その副本を徳翁の先輩が所持し、先輩が「五山十刹図」と称していたとある。道元将来の真本については、徳翁は「名藍堂宇図」と呼んでいたことがわかる。

現存の大乘寺本が副本にあたるかどうかは確かめられないが、以上のように、内容的にも、伝承上も、「五山十刹図」でないことだけは確かであるから、ここでは、徳翁の呼称を参考に、内容的にふさわしい『大宋名藍図』（以下『図』と略称す）と呼ぶことにしよう。まず呼称上より『図』は五山制度を直接問題とする資料でないことを確かめておきたい。

次に『図』の作成年次と将来者との問題を考えてみよう。白石虎月氏は前著（五二四頁）に東福寺本の原本の製作の

年時は、三八念誦の文より、淳祐七年（一二四七）であり、淳祐元年に帰朝した円爾の将来ではありえないと主張した。また横山秀哉博士も「五山十刹図に就て」（大乘寺本の複製の解説、道元禪師鑽仰会、昭和一八年）および『禪の建築』（彰国社、昭和四二年）で、白石説を補い、淳祐七年の成立とすれば、円爾以前に帰朝した道元の将来説は成立しないし、義介入宋に先立つ事一二二年で、義介手写説も成り立たないとされる。

義介（一二一九—一三〇九）手写説とは、現在一般に最も広く伝承されているもので、道元の遺命を奉じて永平寺を復興するために入宋し、諸山の規矩や諸刹を記録して帰国した時に手写したとするものである。義介の入宋期間は、正元元年（一二五九）より弘長二年（一二六二）であり、義介の手写とするかぎり、横山説は正しいといわねばならない。

さて、以上の結論は、すでに先覚によってなされて来たものであり、筆者も同意見である。よって以下は、この結論の補足とそれから発展する五山制度との関係を問題にして行きたい。

まず第一は、告香の図にみられる「礼天目和尚叢林」とある天目文礼の行状である。横山博士は『続伝燈録』卷三六に依りて伝記に不明な部分を残しているが、『天童寺志』卷七に「天台徳雲（天目禪師）行状」があり、伝記が明確となっ

て、『図』の成立年次を確かめるよき資料となる。

文礼、号を滅翁といい、乾道三年（一一六七）に臨安の阮氏に生まる。家が天目山の麓に存したので、天目とも号す。

一六歳で郷里の真相寺智月に依りて剃髪し、まず浄慈寺の混源曇密（一一二〇—一一八八）に参じ、ついで育王山の仏照徳光（一一二二—一二〇三）に謁し、最後に饒州（江西省）の薦福寺の松源崇嶽（一一三三—一二〇二）に参じて嗣法した。その後遊行して、徑山の塗毒智策（一一一七—一一九二）、華藏山（江蘇省常州）の遯菴宗演、瑞巖山の葦堂、天童山の無用浄全（一一三七—一二〇七）に謁した。臨安の広寿寺に出世し、永嘉の能仁、安吉の福泉、杭州の浄慈、四明の天童を歴住した。浄慈三五世、天童三七世と伝える。天童山の住持は、三世六世癡絶道冲（一一六九—一二五〇）が淳祐四年（一二四四）に天童より靈隠に移った後と考えられる。退院の年次は不明であるが、淳祐一〇年（一二五〇）一〇月一〇日、梁渚西丘で示寂した。梁渚西丘は、安吉の福泉に近く、郷里とも近い所と考えられる。世寿八四、僧臘六八。朱熹（一一三〇—一二〇〇）や楊簡（一一四一—一二二六）との親交があったことでも知られている。

以上の文礼の略伝からわかるように、『図』の「礼天目和尚叢林」とは、淳祐一〇年の文礼示寂以前の図であることが確かめられる。『図』に浄慈寺の記事が全くないところをみ

ると、天童山の告香と考えられ、この図も淳祐七年頃とみて大過なからう。

第二に径山の住持について検討してみたい。『図』を横山博士は、七二図に分類されるが、径山関係が二八図（横山説は二三）あり、所属不明の図の中でも、径山に属すると考えられるものも多くある。特に径山楞嚴会之図は破損の為に二〇人程の僧名が不明であるが、四六一名の諱の下の子と役職および百名以上の出身地が記入されている。この僧名からみると、僧堂戒臘牌、衆寮戒臘牌、諷経図の僧名のあるすべての図は、径山の図であることが判明する。因ってこの『図』の筆者がいかにも径山に重点を置き、径山に親しい人であったかがうかがえる。

ところで、径山の図はいつのものかというのと、横山博士も指摘するように、僧堂戒臘牌の最も新しい年が淳祐七年であるところから、径山の図も同年と考えてよいであろう。

淳祐七年の径山の住持と、当時の径山の様子を調べていくと、興味ある問題に出合うことになる。

時の住持は無準師範（一一七八—一二四九）である。師範の伝記資料は、無文道燦（一二七一年寂）撰「径山無準禪師行状」および劉克莊（一一八七—一二六九）撰「径山仏鑑禪師墓誌銘」〔後村先生大全集〕巻一六二所収）を第一とする。

今、関連する師範の伝を考えてみると、師範が径山に住し

たのは、紹定五年（一二三三）の秋のことである。翌年、四月二一日、寺は火災のために消失し、師範は復興に努め、三年して旧観に還している。師範は、寺の火災後の同年七月一五日に入内説法し、嘉熙三年（一二三九）一月二五日に仏鑑禪師（楞嚴会と諷経の図に禪師とある）の号を賜っている。その間、『無準師範禪師語録』巻二によれば、復興した径山に天子より、特に「釈迦宝殿・妙莊嚴閣・凌霄之閣・靈沢之殿・宝所・万年正統之院」の六ヶ所の二四大字の宸翰を賜っている。この年は端平三年（一二三六）の冬で、釈迦宝殿・妙莊嚴閣・凌霄之閣・宝所の名は、『図』の「諸山類集」等に見えるので、『図』はこの年以降の作成であることがわかる。ところが、淳祐二年（一二四二）に寺は再び火災にみまわれるのである。さすがに二度目の火災の時は、大衆は復興は不可能と考えたらしい。師範は再び復興に着手し、承天円爾の援助もあって、「数年ならず」して寺宇が完成し、「飛樓湧殿、画図の中の物の如し」と行状に記している。僧堂戒臘牌にある淳祐七年とは、正に師範の二度にわたる火災から復興した時の径山を意味し、その径山的情況を記す記念的な時期にあったのである。師範は淳祐九年三月一八日、七二歳で示寂す。

このように師範の住持時代であれば、四六一名に及ぶ楞嚴会之図の僧名より、何か直接結びつく師範の弟子が出て来れば、さらに前の推定をより確かめることができるのである。